

## 1. 皮膚疾患

### 他科領域に関連した医原性皮膚障害 (IV)

青木見佳子

日本医科大学皮膚科学教室

#### 1. Dermatologic Disorders

##### Iatrogenic Skin Diseases (IV)

Mikako Aoki

Department of Dermatology, Nippon Medical School

#### 透析性水疱症 (bullous dermatosis of hemodialysis)

透析中の患者にみられる皮膚症状は多彩であるが、bullous dermatosis of hemodialysis と呼ばれる発症機序の不明な水疱を形成する病態がある。夏季に好発する緊満性水疱 (図 1) を特徴とし、組織学的に表皮下水疱を形成 (図 2)、時に好酸球浸潤を伴い、蛍光抗体直接法は陰性である。透析を継続しても、水疱に対する治療の有無に関わらず基本的には自然消退する。本症は、欧米では比較的良好に知られており、透析患者の 4% に発症するとの報告があるが、本邦ではまだ疾患に対する認識度が低い。

#### 薬剤性過敏症候群 (drug-induced hypersensitivity syndrome: DIHS)

DIHS は、近年明らかとなった、潜伏感染しているウイルスの再活性化が関与する重症薬疹である。極めて限られた薬剤 (カルバマゼピン、フェニトイン、フェノバルビタール、ゾニサミド、DDS、サラゾスルファピリジン、メキシレチン、アロプリノール) により発症し、多臓器を障害する。薬剤の内服開始後、3 週から数カ月経って発症し、顔面の高度な浮腫、脂漏部位、口周囲の丘疹、膿疱、鱗屑 (図 3)、多型紅斑様の浮腫性紅斑 (図 4) を特徴とする。原因薬剤が中止されていても皮疹を含む症状が経過中に再燃、増悪することがある。経過中 6 型ヘルペスウイルスをはじめとするヘルペスウイルス属 (7 型ヘルペスウイルス、サイトメガロウイルス、EB ウイルス) の連鎖的な活性化が見られ、原因薬剤の中止とともにパルス療法を含むステロイド全身投与を必要とする。本邦では原因薬剤の 6 割強が抗痙攣剤で、数例の死亡例も報告されている。



図 1

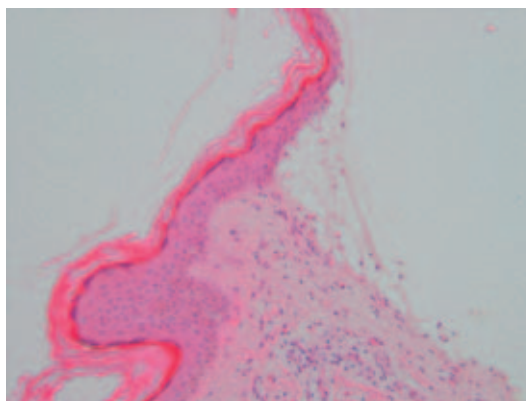


図 2

慢性腎不全で数年前より週3回透析を受けている70歳代男性。4～5年前から、夏季になると緊満性水疱が出現する（図1）。病理組織学的には表皮下に水疱が形成され、真皮浅層の血管周囲に好酸球を混じた炎症性細胞が存在する（図2）。蛍光抗体直接法、間接法はいずれも陰性。一般臨床検査、尿中ポルフィリンやコプロポルフィリン、空腹時血糖、HbA1cは正常。



図 3



図 4

52歳女性。持続する右眼瞼痙攣に対し、テグレトールの内服を開始。テグレトール内服開始5カ月目に発熱を伴って全身に皮疹が出現。テグレトールの内服中止後、5日目に受診。GOT 101, GPT 207, LDH 797, GTP 327, WBC 12,500。プレドニン 30mg/dayの内服を開始し、一旦皮疹は軽減したものの再燃。肝機能障害も持続したためメチルプレドニゾン 1g/day投与を3日間行い、その後プレドニン 40mg/dayより漸減し、内服開始から10週目に投与を中止した。ヒトヘルペスウイルス6型（HHV-6）IgG（FA）値は皮疹出現後2週目で20倍、皮疹出現後5週目で80倍。